

佳作

石見銀山の坑道の中で

広島県 広島市立長束中学校三年 正木 篤

「感動体験」と一口に言ってもいろんなパターンがある。例えば、スポーツ選手が打ち立てた素晴らしい記録やドラマチックな試合の様子、大自然が生み出した圧倒的な景観など……。しかし、僕は特別な誰かではない名もない人々の日常からも感動を得ることがあると思う。

僕はこの夏、石見銀山に行った。つい八十年ほど前まで何百年にわたって、銀を採掘されてきた国内屈指の鉱山だ。いわゆる都市部から離れた地域ではあるが、銀がこの地域に富をもたらしたのだろう、周辺の町は山間部とは思えないほど当時の隆盛の名残が感じられた。六百ほどある坑道のうち公開されている龍源寺間歩を見学することにした。暑い暑い日だったが、坑道の入り口に入ると一気に気温が下がり、ひんやりとした冷気が僕らを包んだ。暗く狭

い坑道の中をゆっくりと歩き進む。

この太陽の光が届かない坑道の中で採掘に従事した人たちの暮らしに僕は思いを馳せた。鉱山を掘った人々の寿命は一般的な人の平均寿命に比べてとても短かったと言うから、この労働環境は非常に過酷なものだったのだろうと思った。銀を採掘するため命を削ってまでこんな山の内部を機械ではなく人力で掘り進んだのだ。富に対する人間の執念のようなものを感じ、少し怖さも感じた。そんなことを思いながら先を進む僕の耳元に鉱夫たちの息遣いが聞こえてくるような気がして、ひんやりとした空気なものにもかかわらず、当時の熱気を感じ、また少し怖さを感じた。

歩く中で僕の後ろの方にいた母が、「やっぱり世界遺産に認定されただけあってバリアフリーに整備したのかな？ 篤でもスムーズに見学できて良かったね。」

と言った。僕は車いすユーザーなので階段などの段差のあるルートが多い観光地は見学することが難しいのだ。だから母のその言葉にうなずこうとすると、僕の車いすを押していた父が、

「いや、ある程度はのちの世に整備したかもしれん

が、銀を運び出すには台車なんかを使ってたんじやないかな？ それなら当時から基本はバリアフリーだっただろう。」

と返した。

その途端、僕の中にビリビリッとするものが貫いた。今の今までまったく異世界の、自分とは関連性がないと思っていた人々の営みが自分と地続きであるのだということが実感できたのである。うっすら持っていた恐怖はいつの間にか、消えていた。先に感じた当時ここで従事した人々の息吹は現代を生きる自分と確実に繋がっていた。急に彼らが実体を帯びた存在に思えてきて、身近に感じられた。

そのことに僕は大きな感動を覚えた。